PETAL

知識の花弁

No.17

慶應義塾大学 三田メディアセンター

佐藤 拓磨
（法学部教授）

『開かれた社会とその敵　第一部　プラトンの呪文』

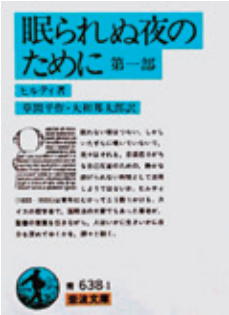
カール・R・ポパー 著
（小河原誠、内田詔夫 訳）/ 未來社

本書は、私が大学3年生の時に読んだ思い出の書籍です。戦後刑法学の泰斗である団藤重光先生の『法学の基礎』（有斐閣、初版：1996年、第2版：2007年）の中で本書が頻繁に引用されていたこと、またゼミの指導教員が社会科学の方法論について強い関心を持っていたことがきっかけで手に取り、一時期は法律の勉強そっちのけで読みふけりました。専門外のため、内容を十分に咀嚼して理解したとはいえませんが、大学院進学後の私の研究方針に大きな影響を与えました。

私が本書に出会った当時、刑法学の世界では、行為無価値論と結果無価値論という学派の対立が熾烈を極めており、学生から研究者に至るまで、この2項対立図式の中で議論をすることが大流行していました。「行為無価値論からは…」、「結果無価値論からは…」といった具合です。まさに閉じられた理論体系同士の闘いが展開されていたわけです。しかし、この学派対立のブームは、最近10年くらいの間に急速に萎んでしまいました。幸い、私は、閉じられた議論を激しく攻撃する本書の影響で、この学派対立からやや距離を取って研究を進めることができました。そういった意味で思い出深く、また今でも出会えてよかったと思える本です。

大沼 あゆみ
（経済学部教授）

『眠られぬ夜のために』（第一部・第二部）



カール・ヒルティ 著
（草間平作、大和邦太郎 訳）
/ 岩波文庫

経済学に惹かれ大学院には入ったものの研究は厳しく将来を見通すことはできなかった。卒業して就職した友人たちは、徐々に、責任ある仕事と十分な給料を得始めていた。沈んだような灰色の日々を送っていた頃に偶然出会ったのが『眠られぬ夜のために』である。一年の日付に合わせた一日一節の構成になっており、どこからでも読むことができるのが特徴である。

この本は、ヒルティの経験と知性、そして彼の信仰にもとづき、人生で人が直面するさまざまな事柄への深い洞察に満ちていた。その言葉は沁みいるように心を解きほぐしてくれ、やがて、日付に合わせ、毎日一節を読むのが習慣になった。

「力の許すかぎり、中絶せずに有益な仕事をすることは、…人生が与えうる一切のうちで、最も良い、最も心を満たしてくれるものである」は、今なお、元気づけられる言葉である。とりわけ当時は、意欲を失いかけたとき、幾度となくこの言葉を読み返したものである。

苦しみや落胆のなかにあるとき、望んでいないことが身にふりかかったとき、あるいはひとから不正を受けたときに、気を鎮め前向きになる術も、一旦身につけると人生をずいぶん楽にしてくれたように思う。

今なお頁を繰るときがあるが、かつては印象づけられることのなかった「老い」や「死」に対するヒルティの言葉に、今や心が揺さぶられるようになっているのは興味深い。

いつか原書（ドイツ語）で読んでみようと思っていたが、年を重ねるうちに学生時代に学んだドイツ語の知識は消散してしまった。「良き計画を先延ばしにすると、いつか不可能になる時が来る」。これは、ヒルティに派生して自分が経験した失敗から得た教訓である。

先生のおすすめ本。

ふだん授業などで教壇に立つ先生方は、一体どんな本を読んでいるでしょうか？
文学部、経済学部、法学部、商学部の先生方４人に、おすすめの本をピックアップしてもらいました。

近森 高明

（文学部教授）

『壁』

安部公房 著
／新潮文庫

20歳の頃、はじめて特定の作家にハマるきっかけになったのが本書だ。名前を失ってしまった男が裁判にかけられる「S・カルマ氏の犯罪」、影を失い透明になった男がバベルの塔に向かう「バベルの塔の狸」、そして家のない男が路上で空っぽの繭に変貌してしまう「赤い繭」。いずれも荒唐無稽なストーリーでありながら、妙な生々しさをもつ描写に惹きつけられた。

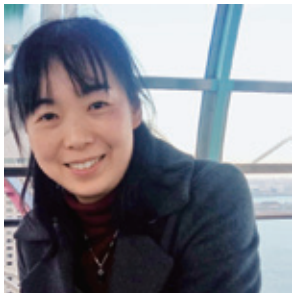
本書を手始めに安部公房の作品を片っ端から読み、シュルレアリスムや実存主義などの系譜を知っていくことになる。その後、うっかり大学院に居残ることになるが、博士論文で扱ったW・ベンヤミンの都市論における「迷宮」感覚は、いま思えば安部公房の作品世界とよく響き合う。となると本書との出会いが、博論を執筆し、大学教員として働き、何とかぽつぽつと論文を書いている、そんなライフコースを左右する遠い契機になっていたのかもしれない。

今回、四半世紀ぶりに読み返してみたが、ラクダに乗った人物が瞳のなかに入っていくとか、望遠鏡の先にみえる箱に手を伸ばせば届くとか、印象的なシーンはいまだに覚えていた。その核にあるのは「歪みのリアリティ」とでもいうべきものだろう。夢の世界やカフカの作品世界につうじる、この「歪みのリアリティ」は、都市環境をかたちづくる技術が抱える「歪み」（それは都市の無意識的次元を読み解く鍵となる）の問題として、いまだに私自身の学問的な興味を支えている。

荒田 映子

（商学部教授）

『フェルマーの最終定理』



サイモン・シン 著
（青木薫 訳）／新潮社

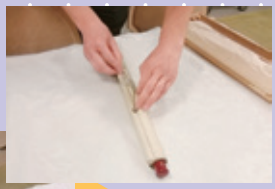
「3以上の自然数nについて，$x^n+y^n=z^n$を満たす正の整数解x, y, zは存在しない」

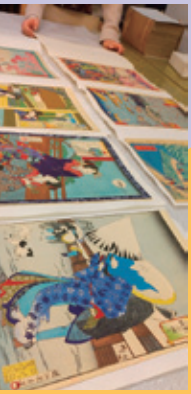
$n=2$ならピュタゴラスの定理として見慣れた式が、$n\geq 3$だと成り立たないというとてもシンプルな定理が証明されるまでのノンフィクション。ピュタゴラスの時代からフェルマーがこの定理を書きつけるまで、そしてその後世界史のうねりの中で、多くの数学者たち（女性も、日本人も登場する）がそれぞれにドラマチックに成果を上げながら、真実に近づいていく様を、手に汗を握りながら読み進めることができる。本書の構成、著者による要所要所でのわかりやすい解説、そして、まるで原作が日本語であるかのような翻訳、これらのどれか1つが欠けていたら、数学は全くの素人の私がこれほどに楽しめることはなかっただろう。

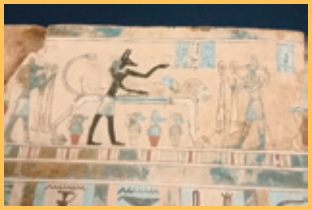
「数学とは、無知の海に浮かぶ知識の島々からなる世界である」（p.300）が、ある発見が架け橋となって個々の島で解決できなかった多くの問題が解決されるようになる。そして、その架け橋は「純粋数学のみならず、応用科学や工学の分野にとっても大きな意味をもって」（p.302）いる。この定理の証明に挑み敗れた者たちの成果は、この架け橋をいくつも生み出し、さらには定理を証明するための新しいツールを生み出していったのである。この（ノンフィクションであるが）物語を読むと、「学問が役に立つかどうか」という議論がいかにばかばかしいかもよくわかる。

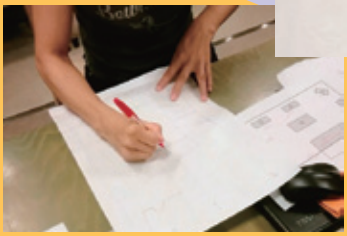
開きづらい洋書には
ヒモ状の重しをそっと

巻物の結び方に
チャレンジ









どの資料の解説を書くか
あみだくじで決めます

あまり開きすぎて
本が傷まないように注意

展示の舞台ウラ

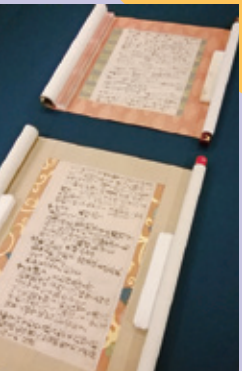
三田メディアセンターの展示、ご存知ですか？

「見たことある！」という声の一方で、
「何かやっているのは知ってるけど…」な方も多数!?
三田メディアの展示がどのように作られているか
「展示委員会」の活動を通してご紹介します。

展示する資料の写真はプロが撮影

屏風を展示することも

脚立に乗れないと
展示委員は務まらない



豆粒のように小さな本を
レンズで拡大

ギャラリートークを先生にお願いします

Step1: テーマ決め

何事もテーマ決めが大事！ それは展示も同じです。

みなさんに馴染みのある分野や、身近なトピックスを取り入れるようにしています。

きれいな本がいっぱい

Step2: 展示資料選定

テーマが決まったら展示資料の候補を考えます。

三田メディアセンターにはいろいろな資料があり、どれも素敵なのでいつも選定に迷ってしまいます。

悩める展示委員

Step3: 模擬展示

次に、実際に候補資料を広げて「模擬展示」です。どのケースに入れる？ どのページがきれい？ どういう見せ方をする？ 貴重書に触れるチャンスでもあり、模擬展示はいつも盛り上がります。また、このタイミングで一番の要である企画展示の正式なタイトルが決まります。

展示ケースの大きさのプチプチに
収まるように模擬展示

Step4: 配布資料やポスター作成

模擬展示に前後してポスターやキャプション、展示室入口に置くリーフレットを作ります。

ポスターは展示資料の画像入り。どの資料が使われているか探してみるのもまた一つの楽しみかも？

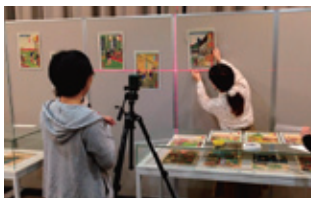
［左］解説文の小冊子
［右］展示室の大型パネルは展示委員のデザイン

Step5: 設　営

いよいよ大詰め！

展示には照度を抑えるなどの配慮が必要です。美術館や博物館等もフラッシュ撮影禁止ですよね？ 資料は光に弱く、色褪せや劣化しやすいためなんです。

長期間展示には不向きな資料は「展示替え」を行うこともあります。貴重書は特に繊細なため配慮が不可欠！ 設営と並行してポスター掲示やwebサイトでの広報も。



［上］照度計：浮世絵に許される光は50ルクス以下
［下］レーザー光線をガイドにパネルをまっすぐ貼ります

いかがでしたか？ 私たち展示委員は、テーマ決めから資料の配置順まで、みなさんに楽しんでもらえるような展示づくりを目指しています。次回ご来館時に展示室が開室していたら、もしくはどこかでポスターを見かけたら、ぜひお立ち寄りいただけると嬉しいです。

『人間本性論』第三巻

David Hume
A Treatise of Human Nature, Volume 3

壽里　竜（経済学部 教授）

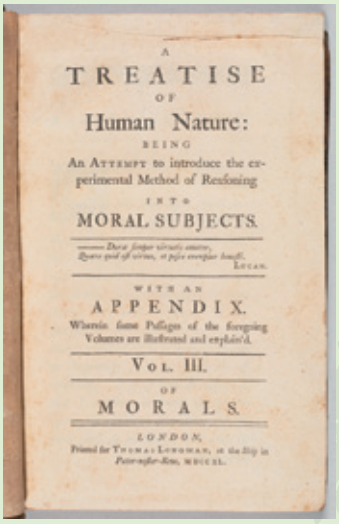
英国を代表する哲学者、デイヴィッド・ヒューム（1711-1776）の『人間本性論』全三巻は、哲学・思想分野に関心のある人たちには広く知られた著作である。1739年に第一巻（知性について）と第二巻（情念について）、翌年に第三巻（道徳について）が出版された。慶應義塾図書館には、かつて高橋誠一郎が所有していた第一・二巻が収められていたが、この第三巻だけはながらく未所蔵だった。

売れ行きがよければ二版が出たはずだが、三巻ともに初版どまり。のちにヒュームはこのデビュー作を「印刷機から死産した」と評して、その失望ぶりを表している。これを機に、彼は難解な哲学書のスタイルを捨て、当時流行のエッセイ・スタイルで日常的なトピックに載せて自らの哲学を語るようになり、文筆家としての名声を確立していく。名声の高まりにもかかわらず（あるいは、それゆえに、というべきか）彼の論敵たちは執拗に『人間本性論』を攻撃しつづけ、最晩年にはヒューム本人がこれを自分の著作とは認めない、とまで宣言するにいたった。今風に言えば、このデビュー作はヒュームにとっての「黒歴史」だったわけである。

だが、この第三巻にかぎっても、様々な学問分野でのちに重要となる議論が数多く含まれている。「である」から「べきである」を導出できない、という「ヒュームの法則」と呼ばれる議論も、政治思想史で知られる「社会契約説の批判者」というヒューム評価も、この巻に由来する。さらに、本書の共感理論はアダム・スミスの『道徳感情論』にも大きな影響を及ぼした。

出版部数が少なく、当時の評価も低かったわりに、のちに大きな影響力を持つようになったため、本書を三巻セットで所蔵している日本国内の大学図書館の数は、片手の指で収まる程度である。ようやく慶應義塾図書館もその仲間入りを果たすことができたのは喜ばしい ── ヒューム本人がどう思っているだろうか、ということは別にして。

『人間本性論』（右：第三巻）



A
TREATISE
OF
Human Nature:
BEING
An Attempt to introduce the experimental Method of Reasoning
INTO
MORAL SUBJECTS.
WITH AN
APPENDIX.
Wherein some Passages of the foregoing Volumes are illustrated and explain'd.
Vol. III.
OF
MORALS.
LONDON,
Printed for Thomas Longman, at the Ship in Paternoster-Row, MDCCXL.

第三巻　標題紙

Information

資料取寄せ費用サポート開始

（2020年4月～）

資料取寄せ費用の一部をメディアセンターが補助します。

開 始 日：2020年4月1日申込み分から

対 象 者：慶應義塾に所属する学生および教職員
通信教育課程生（卒業論文指導登録後 / 夏期・夜間スクーリング受講期間 / 通年スクーリング受講期間）

補助内容：
- 1件3,000円までメディアセンターが補助します。
- 1件3,000円を超えた場合、差額を現金でお支払いください。
- 校費支払いも同様です。

注意事項：申込みの前に必ずKOSMOSで学内所蔵を確認してください。
受取希望館に所蔵がある場合は、書架から直接ご利用ください。

申 込 み：オンラインフォームもしくは図書館カウンターで承ります。
https://www.lib.keio.ac.jp/services/order/index.html

三田に通学している学部生・大学院生の方

学生アシスタント（アルバイト）募集

図書館で返本作業や書架整理をしてくださる方を募集します。

忙しい大学生活のなかで、落ち着いて黙々と作業する時間を持ってみるのはいかがですか。

春学期から勤務できる方のご連絡をお待ちしています！

詳細はメールにてお尋ねください。
→ mmc-cir-group@keio.jp

PETAL
2020 SPRING

編集・発行／慶應義塾大学 三田メディアセンター https://www.lib.keio.ac.jp
発行日／2020年4月1日 印刷／有限会社 梅沢印刷所